
花の瞼

綾瀬

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花の瞼

【Nコード】

N5822D

【作者名】

綾瀬

【あらすじ】

ある男子高校生の何気ないと思われる会話の裏。

昼休みを告げる鐘が鳴る。準備のいい生徒は教師が号令をかける前に机の中に教科書をしまつて、代わりに弁当箱を出し、硬すぎる生徒は教師が去るまで教科書を机に出したまま。

俺と友人はその中間。教師が教卓を離れた瞬間に席を立ち、どちらかがどちらかの席に寄って昼をどうするか決めていた。二人とも弁当はなく、昼食はいつも学食か近所のコンビニになる。学食の席は先輩方優先なので、テイクアウトできるものしか食べられず、昨日で全メニューを食べつくしているの、今日からコンビニを攻める。

「俺、今日は焼きそばの気分」

「俺は焼きうどん」

「ひねろよ」

「そつちが譲れ」

他愛のない会話をしながら、授業とは打って変わった緩んだ空気の中を歩く。数歩前、階段を降りようとする友人の踵が目立つ。友人の学ランは丈が合っており、裾は地面に擦れて破れていた。成長を見越しての大きさらしいが、その成長がくる兆しがない。母と息子の高身長の違いは実を結ぶことなく、蕾のまま落ちてしまいです。無念。

結局、俺は「パン屋さんの焼きそばパン」と大型パン工場が作ったパンと塩焼きそば、友人は関西風焼きうどんと鮭とおかかのおにぎりになった。飲み物への投資は節約で、学食のお茶。片手に紙コップを持った姿が校舎のあちこちで見られる。

「今日はほうじ茶」

俺達の教室がある校舎を背後にして、ベンチに座る。ここは中庭に通じる道で、ベンチの向かいには三年の校舎が建っている。三年の校舎の上には給水塔があつて、誰がつけたのか白い布がはたためていた。登頂記念か、あれは？

俺の視線を追って、友人も給水塔に目をやる。

「いいよな。こんな晴れた日に屋上で昼飯って」

「鍵閉まってるよ、あの場所。天文部は結構自由だけど」

俺は箸を割り、塩焼きそばの蓋を開ける。割り箸は横に割るのが大人のマナー。

「入部してみる？」

友人は鮭のおにぎりをすでに腹に収め、焼きうどんに取りかかっていた。

「今のカップラーメン同好会はどうすんの？」

「そうかあ」

部員は俺ら二人。月一で校舎の各場所にある掲示板に活動成果を発表する新聞を発行している。

「今月掲載予定の百均ラーメン食べ比べは？」

「それもあるよね」

捨てがたいと呟き、友人は口元に青のりをつけて、うどんをすする。

「天文部って、なにしてるんだろ？」

上空は風が強い。給水塔が背負う空を雲が足早に駆けていく。

「星を見てるんだろ？先月の流星群の時、妹は膝かけ持参で夜中に学校いった」

「いいなあ」

友人は箸をくわえたまま給水塔を眺める。

「ホットレモネードを入れた水筒も持ってたかな」

「かわいい」

友人が小首を傾げて照れる。はつきりって、気持ち悪い。

「お前、星が好きだったっけ？」

いぶかしんでいると、「バカだなあ、お兄ちゃん。気づかないの？」と俺の肩を軽く叩いた。

瞬間、さっと血の気が引く。夢であって欲しいけれど、俺はこんな反応する男を何人も見てきた。

「呼ぶな。俺はお前の兄じゃないっ！」

友人は見せつけるように溜息をついて、「兄はこんななのに、妹はものすごくかわいい」と何度も頷き、俺に憐憫の眼差しを向けた。
「そう、彼女はこんな穢れた世の中に舞い降りた天女、吐きだめに鶴」

「おいこら。俺は穢れで、その上ゲロか。お前もだぞ」

「髪は絹糸のように細く艶やか、肌は透けるように白く、恥じらうように赤い頬がかわいらしい。気高すぎる美は近づきがたいが、その温もりある頬が人であることを教える。神でありながら、人」

友人の目は輝いている。まさに恋の虜のそれ。

「そういえば、お前、去年の文化祭の演劇部のシナリオを手伝ってたな……」

お茶を飲みながら、消化に悪そうなご高説を友人のよしみで聞いてやる。

昔から妹がらみで寄ってくる男は多い。いい加減慣れてきているし、軽々しくあいつにいい寄った男はどうなるかわかっているので、黙っている。こいつもああなるのか。

今日もまた、町内のアナウンスが聞こえる。町内の催し物、防災訓練、徘徊老人の広域捜査と種類は様々だ。

ノイズ交じりの無機質な声は叫ぶよう。家族が無事を祈る名前が青い空に響くけれど、抗えもしない強い風が消し去ってしまう。

「ああ、思いはこの空を越えて」

友人がこちらを見る。

「妹さんっ」

抱きつく友人を無理やり剥がし、「気持ち悪い」ととどめのセリフをお見舞いした。

「つままないの。お前に用があるんじゃない。親が同じなんだから、もしかして同じ遺伝子も持つてるかもしれないじゃん？用があるのは、それ」

俺は頭を掻いて空を仰ぎ、目の色を青く染める。なににも考えないように、忘れられない記憶さえ、その色で塗りつぶせるように。何度

もそうした。それは夢だと囁かれるのを何度も夢に見た。

「クレヨンの上に水彩絵の具じゃ、塗りつぶせないよね。弾くもの」
幼い妹は親から与えられた画用紙をクレヨンで力強く塗りつぶす。
始めは雑に円を描くように、最後は紙の端まで残さず職人のような
精密さで一枚一枚塗りつぶしていく。

クレヨンを握る手は強く、強すぎて何本も折った。小さな手の平が
クレヨンで汚れている。色はいつも黒だ。

「ここだけの話、あいつとは血が繋がってない」

やっぱり、俺は今日も塗りつぶせない。俺から零れた秘密が風に乗
って、高く空を舞う。

「そうなの？うわ、抱きつき損」

友人の嫌みたらしく肩を払う手がぴたりと止まる。

「ていうことは、義理の妹とひとつ屋根の下！？いいなあ。うらや
ましいぞ、お兄ちゃん」

「そうでもない、よ」

疲れた表情を隠すように俯く。

「焼きそばパン、いる？」

「いる」

ラッキーといって、俺の脇からパンを奪い、早速包みを破きだす。
さっきの人探しの町内アナウンス。探し人の年齢は十六歳だった。
この町は人探しのアナウンスが多い。呼ばれる名前は痴呆で徘徊す
る老人より、圧倒的に若者が多かった。

彼女は花に埋もれて眠っていた。

引越先の中古の一軒家には小さな庭がついていた。

最初に自分の部屋を見たいと意気込んだ幼い俺は、すぐさま二階に
上がり、子供部屋を目指した。階段を登ると共に高まる胸の音を抑
えて、部屋の前に立つ。

開け放されたドアの向こうに箆笥を見つけた。前の住人が置いてい
ったのだろうか。深みのある茶に塗られたそれは濡れたような艶や

かで、崩れ落ちないのが不思議だった。

カーテンもなく、乾いた空気の中を埃がゆつくりと舞っている。生活感のない、寒々しい部屋。だから、箆笥の引出しから見える花びらは目立った。

幼い俺は箆笥の前に屈み、引出しの取手に触れる。真鍮製で、するりと手の温度を奪う。指を通せば二度と外れないような恐怖感と同時に子供には早い疼くような感覚を与えた。

手に力を込め、誘われるように腕を引く。子供の力でも簡単に引くことができた。

引出しの中いっぱいに花が詰まっていた。

花は摘み取られたばかりのように瑞々しく、香気を放っていた。さすがに子供でもこれは変だと思い、一つ手に取って、ぎくりとする大輪の花の下に人の顔があった。驚きすぎて、声も出ない。それは自分より幼い女の子のようだった。肌の色は白く、髪は絹糸のように細く艶やか。ただし、頬に赤みはない。目は細かな花びらで隠れていて、開けているのか、閉じているのかもわからなかった。

強い花の香りの中に別の香りを感じた。生き物としてそれを否定する匂い、生きた者からはしない香りが混ざっている。恐怖のあまり動けない俺は花を介して彼女と向き合っていた。

花の香りが、死の香りが部屋を満たした直後。俺の背後でパシッと音がした。

咄嗟に音の方を振り返る。そこには来た時と同じように埃が舞っているだけだった。

なんだと安堵すると、膝に置いた指に冷たい感触が当たった。見ると、一枚の花びらが落ちている。摘まみ上げた時に、あれ?と思った。呼吸が楽になっている。ついさっきまでしていた死の匂いがない。

途端に横から伸びてきた冷たい腕に絡めとられて、俺は箆笥の中に引きずり込まれた。

「妹はやめといたほうがいいぞ」

冷めたお茶に口をつける。

「なんで」

「俺、お前の面倒見たくない」

陰気な俺の声に友人は「お前の世話にはなんないよ」と軽く返す。

昼休み終了の鐘が鳴る。「そう願う」といつて俺は立ち上がった。

さて、今日は家に帰ってから力仕事が待っている。午後の授業は眠って、体力温存だ。

人でない者のあいつが食べた人だった者を埋めないといけない。

>了<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5822d/>

花の瞼

2011年7月17日16時29分発行